
マレピトの楽園

山下しんか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マレビトの楽園

【Nコード】

N4670Z

【作者名】

山下しんか

【あらすじ】

ふと気がつくくと、幸田命司は見知らぬ廃墟に居た。それまでは、ごく普通に貧乏生活を送っていた苦学生だったハズなのだが。天をあおぎ見ればうらかな日差し。

目の前には狐顔の人物と、ロリ巨乳でとがり耳の少女。

そして、デカい氷に包まれている自分。

凍えそうな寒さの中、それまでの経緯を思い出した命司は、どうやらここが異世界である事を理解する。

秘法と呼ばれる超常の力が当たり前にある面白そうな世界で、命司

はしかし莫大な借金を背負わされ、なし崩し的に目の前の二人の元
で働く事となるのだが……。

短編と連載間違えてたので再掲しました。ご迷惑おかけして申し
訳ありません。

序章 狐男と妖精女

??そう、貴方あなたは言霊ことだま使いなのですか??

??ふふ、ひどい世界なのですね、そちらは??

??なら、いつそこちらにいらっしやいませんか？ 良いところで
すよ、こちらは??

??分からない？ そう、貴方には分からないかも知れませんね??

??でも大丈夫だいじょうぶ。私が、まるで貴方の意志であるかのように、導い
て差し上げますから??

??私？ 私の名は??

気がつくと、幸田命司こうだめいじは瓦礫がれきに埋もれるようにして、椅子に座っ
ていた。

頭上には抜けるような青空が見えるが、そこはまぎれもなく建物
の中だ。瓦礫は、倒壊した装置と屋根、それから壁の一部。そして、
その瓦礫の山の中にはテーブルと椅子があり、差し向かいにはつい
さつき出逢あひまったばかりの女たちの顔がある。

一人は真紅しんくの髪かみの妖精妖精っぽい少女。

そしてもう一人は、モロにキツネ顔で立派な尻尾しっぽまで生やした姉
似の人物。

現在、命司はどういうワケか、氷の塊かたまりの中から顔だけ出している
という異常な状況にある。

他方、『彼女たち』に視線を向け、こうして陽の光の下で見ると、一人？？姉かと思つてしまつた者は、似てはいるが、どうも違う様子だと思へた。狐のような頭上の耳はたまに動いているし、面差しも姉より中性的だ。着ている服は、日本の神主が着ている狩衣みたいな感じで全体が緩やかだが、それでもその体格は男っぽい気がした。

そしてもう一人？？女の子、と思つた人物も、尖つた耳が時折動くし、チャイナドレス？？というより、ベトナムのアオザイみたいな服に、その小さな体軀を包んでいる。どれを取つても目を引くが、その小さな背丈に比して胸が大きいのが、何よりも特徴的だ。

(ロリ巨乳……)

思わず、そんな四文字が命司の脳裏を掠める。

そんな命司の視線を感じたのか、女の子は汚いものでも見るかのような視線を向けて、胸元を両腕で隠した。

と、不意に姉似的キツネ顔が話しかけてくる。何語かもさっぱり分からない言語で。

だが、言葉は分からないものの、一つだけ確信した事がある。キツネ顔の声質は、女のものではなかった。つまり、少なくともそのテの方々から男寄りの存在だろうと思う。とはいえ、まだ明確には分からないが。

ただ、どちらにしてもこのままでは埒があかない。いずれにしてもコミュニケーションは大切だ。そう思い、命司は口を開いた。

「いや、分かんないって。つか、もし万が一姉貴のイタズラとかだつたら、マジで許さないからな？」

いくら天才でオタク趣味で『腐』属性を持っているどうしようもない姉でも、多分ここまで凝つたイタズラはしないはずだ。そうは思つていても、命司はあの姉に関して、いつでも『万が一』を考へてしまう。

すると、キツネ顔はしばし考え込み、やがてどこから出したものか、一本の細く尖つた氷みたいな棒を手にした。それを鉛筆のよう

に持って、命司の顔に近づけてくる。

「お、おい、何する気だよ？」

ゆっくりゆっくり、テーブルに身を乗り出して命司の『眼』に、その尖った先端を近づけてくるキツネ顔。命司は何をされるかわからない恐怖を感じつつも、精々が顔をそむける事しかできない。

が、それも??

「うわあ！ やゝめえゝろおゝ！」

命司は思わず叫んだ。いつの間にか背後に回った女の子が、その小さな体たくから想像もつかない怪力で、命司の頭を固定したのだ。左目に迫る棒の先端。その恐怖に耐えきれず、命司は両目を固くつむつた。すると、

(なんか……書いてる?)

ひんやりとした、細く固い感触がまぶた瞼の上を走り回る。固い先端で書かれているので微かに痛むが、痛みを与えるのが目的ではなさそうだ。そして、両の瞼が終わると、今度は左右の耳たぶをなぞっていく。それから耳が終わると、今度は唇からあご顎、喉にかけてなぞっていった。

そして??

「おい、聞こえとるか？ 言葉分かんねやったら、眼え開けてみい」
そんな声が聞こえ、同時に頭の固定が解かれた。

(か、関西弁?)

命司はゆっくりと瞼を開いていく。

「やった！ さつすがマイスター！ だゝい成功ゝ！」
右手すぐ傍そばから、今度は女の子が理解出来る言葉を紡つむいだ。

「ねえねえ、キミ、どこから来たの？」

女の子はテーブルに上半身を乗せると、命司の顔を覗き込んだ。長く、そして尖とがった耳の先が、好奇心を表現するように上下に動く。着ている物はアジア風だが、その姿は命司に西洋の妖精を連想させた。

だが、

「しゃしゃり出てくんな、このロリが」

不意にキツネ顔はそう言つと、女の子を一睨みする。そんな狐男の様子に、女の子は不満そうな表情を見せた。

「ロリじゃないよお。マイスター、あたしが二十三だって知ってるじゃん」

「そのナリで言うても説得力皆無やるが。とにかく黙つとれ。やつと話通じるようになったんや、脱線さすな」

どうしてか不機嫌な様子の狐男。精々が小学六年生程度にしか見えない傍らの女の子が、二十三歳だという事も驚くが、それ以上に今にも掴みかかってきそうなこのキツネ顔の態度の方が命司は気になる。もつとも、なぜ不機嫌なのか。その理由はこの廃墟を見れば、おおよそ理解出来る気がするが。

「まあええ、取り敢えず名前からや。俺はユート。ユート・ユーゼン。で、こつちのロリガキは、サラ・アフメドや。お前は？」

不機嫌ながらも、しかし理性的な雰囲気滲ませて、その狐男？ユートはそう訊いてきた。

「違うから！ ロリじゃないから！ 結婚できる歳だからねあたしは！」

ロリガキ？？もとい、サラが横から口を挟む。が、再度ユートに睨まれて口をつぐんだ。

「え〜……命司……幸田……命司っす……」

取り敢えず、氷漬けになって身動き取れない身の上だ。不思議なことに氷は解けてこないのだが、寒い事は寒いので、早く解放して欲しい。そんなワケで、命司は素直になるのが得策だと思つた。

「エーメイジ・コーダ・メイジッス、か。アホっぽい名前やな」

言つて、ユートはいつの間にか取り出していた手帳に、命司の名前を書き連ねていく。しかし不思議な事に、初めて見るその文字も、命司はどういったものかが理解できた。漢字に近いだろうか。表音文字ではなく、明らかに表意文字のようだ。それも、原始的な漢字??歴史や国語で習つた『甲骨文字』とかいうものに近い。

とまあ、それはひとまず置いておくことにして、命司は取り敢えず誤りを正さなくてはならない。

「いやいやいや、違うから。俺の名前は『命司』で、苗字は『幸田』。ワカル？」

命司がそう告げると、ユートは顔を上げて命司を睨みつけた。秀麗だが、そのキツネ目が姉を連想させ、気圧されてしまう。

刹那、

「ぐあっ！」

ユートが投げつけたペンが額に突き刺さり、命司は悲鳴を上げた。「あゝあ。今マイスター機嫌悪いからさ、八キ八キ答えた方がいい

よっ！」

さんざんユートに罵倒され、反論する度に睨まれたせいか、サラ(二三)までもが冷めた視線を送ってくる。

そして、投げて刺さったペンはそのままに、ユートは新しいペンでさっきのメモを修正していた。

「……で、メイジ・コーダ君よ。お前、どっから来たん？ ったく、人様の高価な機材破壊しよって。くだらん答えやったら、そのままダインのカルデラ湖に浮かべたるからな？」

「沈める、じゃないの？ マイスター」

「氷は浮くやろ。まあ見ててみい。ひっくり返って、頭だけ水に浸かんねんから。……もがき苦しむ様が目に見えんで」

「やあん、コワイ〜！ マイスター！ たら鬼畜ね〜！」

虜囚そっちのけで、空恐ろしい会話をしている方々。だがそれでも、聞こえる会話の内容から、元の世界と物理法則は似ているようだ。命司は思った。

「え〜と、俺はデスね……」

ここはもう、洗いざらい話すしかない。せつかく姉や現実世界から逃げてこれたのに、ここで死んでは無駄死にだ。

それは、いつの記憶だろうか。

命司の目の前には、だいぶ前に死んだ祖父の姿が在った。

人の良さそうな細い眼差し。命司の容貌は、まぎれもなく祖父譲りだ。

浄衣じょういに身を包んだその姿。祖父は田舎いなかの神社の神主かみぬしだった。そんな祖父に、命司は色々な事を教わった。その中でも、とりわけ？「そうかそうか、イジメられたか。まあ、そんなに気にするな。人はな？」

自分の下に誰かがいないと気が済まんよのよ。蝉時雨せみしぐれの中で、泣きじゃくる命司を膝ひざに抱き、本殿ほんでんの階段に腰掛ける祖父は、命司の頭を撫なでながらそう言った。

「そんなのヤだよ！ ボク、悪い事してないもん！ どうしてボクがイジメられるの？」

人生という名の苦行競技会にエントリーしてから五年目ほどで、初めて経験した理不尽りふじん。それを承服しょうぷくできる術すべも、理解できる道理も、幼い命司は持ち合わせていない。

「それに耐えられんのだつたら、じゃあ、お前が強くなるしかないなあ……幸い、お前は声に力がある。その使い方を、祖父いじちゃんが教えてやるつか？」

「……ちか……ら？」

泣くのをやめて、命司は後ろの祖父の顔を見上げた。

「古来、日本には言葉に魂たましいが宿ると信じられてきた。それを『言霊ことたま』という。祖父ちゃんはなはな、その使い手なんだぞ？」

何を言っているのかなんて、幼い命司には半分も分らない。でも、それがあんなら。それができるのなら、大好きな、祖父のようになんか？

「そうしたら……いじめられない？」

「それは、お前が正しく使えたら、な。……祖父ちゃんの言うこと

守れるか？」

「うん！」

命司が力強く頷くと、祖父は愉快げに、そして嬉しそうに笑った。

意識が、浮上していく。

懐かしい祖父の姿は遠く消え去り、

「じい……ちゃん……」

現実が、ふいに命司を包んだ。

(どこだ、ここ……?)

ぼやけた視界がハッキリとしてくると、命司は自分が金属製で円筒形の小部屋に入っている事に気付いた。いや、『入っている』、というよりは、『詰まっている』という表現がより正しい。さらに言えば、『詰まっている』のではなく、『詰め込まれている』という状況なのだが。

体育座りで手足の伸ばせない狭さの中、視線の高さよりも少し上に、明かりの射し込む窓がある。膝が壁につかえて伸ばせない両足の代わりに、命司は両腕を床に突いて、身体を微かに持ち上げた。そして、その先に見えたもの?? いや、見えた『者』は??

(やっぱりか)

そこにいたのは、数人の白衣の男と、林立する機械の群。そしてその中心に堂々と立つのは、誰あろう命司の姉の安和だ。命司の八つ年上で二十七歳。だが、既にその社会的地位は確立されている。狂徒大学教授であり、世界でも屈指の量子物理学博士。それが命司の姉だ。

性格も顔立ちも、正に『雌狐』といった形容がぴったりの女。

実家の借金苦を物ともせず、自分だけ密かに家庭教師のバイトで金を貯め、奨学金で大学を出て、この若さで博士にまで登り詰めた。紛れもない天才であり、それだけなら尊敬にも値する。の、だ

が??

「あら、オハヨー、マイブラザー」

安和の口が動くと同時に、頭上のスピーカーから声が聞こえた。相手はバイト先の客ではない。命司は遠慮なく怒りを爆発させる。「テンメエ〜っ！ また拉致りやがってゴルアアアア！ 俺を何回テメーの実験材料にすりや気が済むんだよ！」

そう、この状況と酷似した状況に、命司は何度もさらされてきた。安和の研究は『量子レポート』。昔のハリウッド映画で、『ハエと合体しちゃう博士』が研究していたテーマだ。

そしてこれまでに、それに付随する人体実験の材料として、命司はムリヤリ『貢献』させられてきた。

正体不明の新薬を注射されたり、身体の一部を量子化されたり、

この間も、『並行宇宙』とやらの誰かと脳内文通させられたばかりだ。

「素直じゃないなあ、マイブラザー。いい？」

口の端を歪め、安和は右手人差し指を立てて、左右に振ってみせた。

「今回は、記念すべき最後の人体実験。その被験者にキミは選ばれたんだヨ？ この超天才量子物理学博士・幸田安和様のネ！」

額に浮かぶは怒りの証。姉の超絶自己中発言に、命司はとうとうキレた。

「コーダアンナサマノネ！ ……じゃねえこのマッドサイエンティストが！ いいか？ 俺はこれからバイトなんだよ！ さっさと解放しやがれクソ姉貴！」

「ああ、ヒドいわマイブラザー。せつかく、何の取り柄もない平凡な専門学校生のアンタが、歴史に名を残せるチャンスを与えてあげてるのに……姉さんの愛を拒絶する気？」

手弱女っぽく身体をくねらせ、わざとらしく涙を見せる安和。その態度も気に入らないが、何よりこんなヤツと姉弟だという事が、

命司は一番許せない。

「ああ！ ああ！ 確実に名前残るだろうよ！ 量子テレポートだかの、世界初の事故の犠牲者だつて事でな！ つか、頼むから俺で実験すんのはヤメてくれ！ マジで俺は忙しいんだよ！ ったく、オヤジ達の借金苦から、テメーだけ勝手かつ華麗にフェードアウトしやがったクセに！」

嫌味、懇願、ついでに恨みの文句を並べ立て、命司は狭い窓にべつたりと頬を押し付けて姉を睨んだ。

「身内だからいいんじゃない。他人だつたら万が一の時、人道的に問題あるでしょ？ それに、親の借金で子供が苦しむのは理不尽だわ」

しらっと涼しい貌で、安和は微笑んで見せる。

知らず、命司の額に数本の青筋が浮き上がった。

「身内の方が問題あるよボケえ！ つか、マジやめろよ！ マジでバイトあんだつて！」

「猛り狂う命司。だが、安和の次の言葉が命司を一瞬啞然とさせた。ああ、今日行けないって連絡しといたし。それに、これでも姉として、あんたの将来心配してんのよ？ その歳でステに負け組に片足突っ込んでるアンタを、あたしが人類の未来の為に役立たせてあげようと思つたんじゃない」

啞然とした状況から、再び額に浮き上がる血管の群。それは一瞬で強度限界を超えてしまった。命司の額から一筋赤いものが吹き出し、覗き窓をステキな赤色に染めていく。

(こんのアマああああ……！)

社会に出て、何度も何度も耳にし、何度も何度も浴びせかけられた言葉、『勝ち組』『負け組』。それをこの期に及んで、実の姉から浴びせられるとは。

「大きなお世話だこのヤロウ！ まだ負け組だつて決まってねえだろが！ つか、身内ならオヤジ達の借金なんとかしてやれよええっ？ 勝ち組様よお！」

そう吠えつつも、しかし命司は姉の立ち位置？その一点だけは分からない訳でもなかった。元々、宗教にハマった叔母の保証人になった、お人好しの親父が悪いし、マヌケな話だとも思う。そのせいで、祖父の死後に相続した神社は人手に渡り、当の両親は外国に出嫁ぎ中で、一家離散状態なのだ。

だがそれでも、姉の態度は身内として許せない。

命司の剣幕に、安和は苦笑を浮かべた。そして、直後にそれは嘲笑へと変わる。

「やれやれ……たく、だからアンタは負け組脳だつてのよ。いい？この実験が成功したら、どんだけの金が入ってくるか分かってる？ハッキリ言つて、ザックザクのウツハウハよ？」

安和の言葉は正論には違いない。金持ちになれる。その可能性も否定はしない、しかし、それでも譲れないものが命司にはある。

（だからって、弟で人体実験していいってコトにはならないと思いますよ？オネエサマ？）

命司の一番身近な存在に、金に取り憑かれた亡者がいたという訳だ。そして、社会の『底辺』を知っている命司としては、大金持ちという存在は遠く、なりたいたいと思わない。命司はただ、日々の暮らしに困らない程度、更に言うのなら？

「知らねえよ！分かりたくもねえし！俺は学費稼ぎたいだけなんだよ！分かったらサツサと俺を帰せブス！」

憤懣を言霊に乗せ、命司は放った。

だが、命司の不用意な罵詈雑言に、安和は刹那、不敵な笑みを浮かべて見せた。

そんな姉の貌を見て、命司は思い出した事がある。嫌な汗が額から頬を伝って落ちていく。

（……そうだ、姉貴、言霊に耐性あつたんだつた）

過去に数回試した結果、安和は命司の声の力『言霊』の存在に気付き、命司の言葉に身構えるようになった。つまり、最初から気構えを持って聞けば、命司の言霊は効力を失う。その程度の能力なの

だ。

そして、放った言霊は案の定、姉には全く効かず、それどころか、むしろ彼女の感情を逆撫さかなでする結果となった。

安和は額に青筋を浮かべると、周囲の助手達にその笑顔に向けた。
(ヤバイヤバイヤバイヤバイ！)

満面の笑みで、助手に何事かの指示を出す安和。その貌の下には、明らかに弟への怒りが埋まっている。

「んじゃ、さつさといっちゃんいましょーか」

刹那つなに唸る機械群。

「お、おい、マジやめろよ……」

不安と恐怖が入り交じり、命司の口からこぼれて落ちた。だが、
実弟じつていの懇願こんがんにも姉の笑顔は崩れない。

安和は命司に向けて口を開いた。まるで、不安な幼子おさなこを優しくあやすかの様に。

「ダイジョーブだって。犬とネコは戻ってきたから。……ミルクしか飲まなくなっちゃったけど」

「ダイジョーブじゃねえよソレ！ 幼児退行してんじゃねーか！

つか、人格崩壊ほうかいするかもだろソレ！」

「ダイジョーブだって。ジューブン微調整びちやうせい繰り返したんだからあ」

「ダイジョーブじゃねえよ！ 微調整でなんとかなる問題じゃねえからソレ！ つか、ハエとか一緒に入ってねえだろうなっ？」

「あ、さつきカマドウマみたいの入ったかも。まあ、いつか」

通称『便所つうしよコオロギ』のセクシーに黒光りするあの背中を想像しながら、命司の全身に戦慄せんりつが走った。

「どうせならバツタがいいです！ 是非バツタにチェンジして下さい！ それも今すぐ！」

錯乱さくらん、いや狂乱きやうらんし、命司の口をついた的外れの最後の懇願こんがん？？と
いうより、むしろ哀願あいがんも？？

?? 姉の笑顔には届かなかった。

「……んじゃ待ってるわよ？ 愛いとしのマイブラザー」

ウィンクと共にキスを投げってくる姉。

鳴動する機械群。

やがて、命司が入っている機械の中に、淡い光あわが満ちてくる。

光は粒子りゅうじとなり、それが、元々自身の身体を構成していたものだ

と悟さとった時？？

「テンめええ！ 憶えてるゴルアアアア……」

そう言い置いて、命司の意識は遠のいていった。

(……ここどこ?)

気が付いた時、命司は『そこ』にいた。

そこは、広い円筒形の部屋。いや、部屋かどうかも分からない。ただ、命司の周囲には、まるでモニター画面のようなものが、無数に浮いている。それらは、特に機械のボディを持っている訳ではない。あくまで、液晶モニターから『画面』だけを抜き出したかのようなものが、厚みを感じさせずに浮いているだけだった。

近くのを観察すると、それらはまるで、ドラマの一シーンを放映しているかのように常に動いている。

壮大な自然、

巨大な異形の生き物、

一見すると人間に見えるが、ツノやシツポの生えた何か。

違う画面を見る度に、違った景色が見えてくる。

今の人類よりも、遥かに文明が進んでいるかのような都市が見えたかと思えば、

まるで石器時代の建物ばかりの集落が見えるものもある。

「……なんなんだ、ここ……」

ひよつとすると、以前から念願だった、宇宙人に拉致されたという状況かも知れない。そう思ったが、自分以外に誰も見えない場所で、それを示す証拠も何もない。

命司はしかたなく、画面の一つに触れようとした。と、その時??

(そこでもいいのか?)

そんな自問が湧いた。

「……つつたつて、他にできそうな事無いし……どうやったら、元

の場所に帰れるんだ？」

ただ独り、自答を返す。

（戻りたい？ 戻りたいのか？）

刹那せつなの自問。気が付けば、目の前の画面には、姉・安和あんなが慌てふためいている姿が映っていた。

「ハハ……バカだなアイツ。なに今さら慌ててんだよ……どんだけ自分の技術、過信してたんだ……？」

がつくりと頂垂うなだれる安和の様子に、あんな姉でも心配してくれるのか、と、そう思った時??

安和は指を鳴らすと、助手達に指示をして室内の照明を落とし、そのまま彼らを率いて出て行った。

「……ク……クククク……」

思わず、笑声がこぼれた。

そういえばそうだ。躊躇ちゆうちゆうなく弟で人体実験を繰り返してきた姉が、今更いまさらこんな事で、嘆き悲しむハズがない。あの去り際に見えた苦笑くしやうは間違いない。これまでがそうだったように、どこかの居酒屋で『反省会』という名目の飲み会を開くつもりなのだ。

「まあ、仕方ねえな。こうなっちまって、今さら元の世界に未練はねえ」

冷徹れいてつにそう呟つぶやくと、同時に命司の周囲たたよに漂っていた画面が、命司の周りを高速で回転し始めた。

（じゃあ、どうする？）

再度の自問。

「そんなもん決まってる。或ある意味、姉貴には感謝してるぞ。これは、またとないチャンスなんだからな」

（元の世界に未練はないのか？）

続いた自問に、刹那、様々な顔が脳裏のうりに浮かぶ。

父と母。

友人達。

バイト仲間。

そして、大好きだった祖父。

だが、

それでも、

この欲求を止められない。

物心付いた時には、既に狂っていた国。

そこから更に、止めどなく狂っていく世界。

『力』を持つ者達の果てしない欲望の中で、

見えない何かにがんじがらめにされている『力』無き者達。

そして、その『力』無き者の一人ではない自分。

世界は?? 少なくとも、『命司が知っている範囲の世界』は、命司に居場所を与えてくれなかった。

大多数の有象無象として、ある日突然消えてしまっても、誰も気にも留めない。そんな存在でしかなかった。

「だから俺は?? 俺に居場所をくれる世界に行く」

そう覚悟が決まった刹那、

十数個の画面?? 『世界』が命司の周囲に固定された。

そして、その中の一つ、真正面に在るそれに命司は手を伸ばす。

(死ぬかもしれないよ?)

「分かってる」

(二度と戻れないかもしれないよ?)

「望むところだ」

(行った先にも、居場所なんてないかもしれないよ?)

その自問に、指先が一瞬止まる。

だが??

「……少なくとも、元の世界よりは希望があるさ」

再び動き出す指先。その指先が触れると、画面に波紋はもとが広がり??

??命司はその中へと引き込まれた。

命司の意識に、徐々に感覚が戻ってくる。

(……狭いな)

最初に感じた、そんな感覚。どうも、またしても何かの装置に入っているようだ。

(ああ、さっきのって、やっぱり幻覚か……眼を開けると、あのクソ姉貴がいるんだろうな)

成功だ！ とか騒ぎながら、しかし弟の事はほったらかしで、助手達と抱き合つて互いに喝采を送り、打ち上げに行きかけた所で、実験装置内の弟の存在に気付き、ようやく解放してくれる。そういうパターンだろう。

そんな事を考えながら、命司は徐々に眼を開いていく。

そして、視界がひらけたその時？

(……やっぱりね)

寂寥の想いと共に、そんな感慨が胸中に去来した。

目の前、透明な壁越しに、キツネ顔が在った。

(オイオイ、何考えてんだ？ コイツ)

思わず、命司は呆れ果てた。

いつもの姉のキツネ顔。のハズが、ちよつとばかり違っている。頭に載るのは、まんま狐を連想させる耳。いつもの天然黒色の髪にまで工夫を凝らしたようで、髪は金色に輝き、綺麗に櫛を通された様子のそれは、左右をボブカットの様にして、後ろは短いポニーテールを作っていた。

新鮮ではあるが、カワイイつもりなのか？ と、面と向かって問いたくなる。

そして、姉貴ご自慢じまんの優秀な助手達。

(……達？ あれ？)

命司は室内を見渡した。だが、複数いたハズの助手は、そこに一人しかいなかった。

(こんな助手、いたか？)

それは、小さな女の子。

先の尖とがった長めの耳と、真紅しんくの髪に施した、左側で結ゆった肩までの長さのサイドテール。特徴的な、くりっとした大きな丸い眼差しが愛嬌あいぎょうたっぷりだ。

そんな彼女たちは、まるで実験の成功が信じられないかのように、微動びどうだにせず両の眼を目一杯めいっぱいに見開いて、命司を凝視ぎょうししていた。

刹那せつな、命司は突然に息苦しさを感じた。どうやって入れたものか？？いや違う。テレポートしたというのなら、入り口は必ずしも必要ではない。それは分かるが？？

「おい！ 開けるよ！ マジで殺す気がこのクソ姉貴！」

いよいよ酸欠がひどくなり、命司は自分が入っているガラス容器を叩いた。

だが、目の前の二人は顔を真っ青にして、必死にかぶりを振りながら、両腕を交差させている。『やめる』というジェスチャーらしいが、しかし、切羽詰せつぱつまつった命司はそれに従うつもりも無いし、何より姉の機材なら遠慮えんりょはいらない。

意識に霞かすみがかかり始めた時？？

(こ、の、クソツタレがああああああ！)

??命司は全身に力を込めて、両手足を突っ張った。多分、これで容器を破壊できなければ酸欠で死ぬ。

と、不意に眼前にヒビが走り、その容器の三分の一が割れ砕けた。「ぶはあつ！ ……ザマミ口姉貴いい……イヒヒヒヒ」

これまで受けてきた仕打ちでテンションが上昇しまくり、不気味な笑声がこぼれる。

ゆっくりと新鮮な空気を吸い込みながら、命司は床に降り立つ。

ひとまず危機は脱した。あとは、どうしてか額に青筋を浮かべている『姉貴コスプレバージョン』に、怒りの鉄槌てつづいを下すだけだ。「女に手を上げるなんてサイテーよ！」などと言ってくるだろうが、そんなものはカンケーない。

「往生せえやあああああ！」

命司は『姉貴獣耳バージョン』に飛びかかった。

が???

瞬時に傍らの女の子が間に入ったかと思つた時、

「かはつ……………」

前方斜め下から、命司の腹を突き上げるように、ハイキックが刺さっていた。一瞬で呼吸が停止し、女の子が避けた場所にカエルのように落ちる。

(こ、このガキい)

呼吸困難で身体を丸めながら、視線を件の二人に向けると、頭上では、彼女たちが奇妙な言葉で会話している。

と、突然命司の後ろ???ちょうど、命司が入っていた容器の在る方から轟音が聞こえた。それは、何かが倒壊する音。砕け、飛び散り、連鎖的に破壊音が大きくなっていく。そして、今いる建物の屋根までが崩れ???

(ヒイヒイ!)

??命司の上に降り注いだのだった。

「……とまあ、そーゆーワケだ」

小一時間後、概略がいりやくを全て話し終えた命司の前では、ユートとサラが腕を組んで考え込んでいた。

「……じゃあ何か？ メイジ、お前は这个世界の住人ちゃう、いう事か？」

「え〜？ どう見ても西の白の国の人だよこのコ」

「信じる信じないはそっちの勝手。俺は嘘うそは言つてない。……つか、そろそろここから出してくんない？ 凍死とうじしちまうよ」

氷漬けにされてから、かれこれ一時間強。言葉通り、そろそろ命司の身体は小刻みに震え、唇が紫になっていた。

「まあ、せやな。取り敢えず……」

微かに頷うなづいて、ユートはテーブルに身を乗り出すと、命司を包んでいる氷の右側に、左手で軽く触れた。と同時に、その部分？？腕一本分ほどが解けて流れ落ちた。

「おお！ ……って、右腕だけ？」

自由になった右腕。そこだけが、急に外気の熱を吸収し始める。

「まあ、その間抜ぞくけつぷりはちゃう思おもうけど、俺の属性宝珠ぞくせいほうじゆ狙ねらうとるヤツかも知れへんからな。取り敢えず、サインだけできるように右腕だけ解放したったわ」

言つて、ユートは何やら数枚の書面を命司の眼前に提示した。

「……あの、これ？」

命司が訳も分からずそう訊たずねると、

「借用証と、契約書けいやくしょ、それから、住民台帳登録出願書めんどじうや」

面倒めんどじうくさそうに、ユートは一枚一枚そう説明した。

「……………はあ？ ……ハナシ、見えないんだけど……………借用証？ ……つて、俺が何を借りたんだよ？」

何か『胡散臭さ大爆発』な展開に、命司は思わず身構える。叔母も、こんな調子でなし崩しの宗教に引きずり込まれたのだろうかなどと、今まで考えもしなかった事が脳裏を過ぎった。

が、その刹那、ユートは額に青筋を立て、椅子から立ち上がった。「……………あんな？ ……せつかく錬金術の機材一式自腹で揃えてやな、依頼された希少金属練成してたここにやで？ ……どっかのバカが転移してきやがったつちゅうワケや。で、何トチ狂ったんか知らへんけど、機材ん中から飛び出して、機材一式見事に全部破壊してくれてやな、オマケに天井にまで大穴開けやがって。せやけど心の広い俺様はやな、その身寄りの無い正体不明の馬鹿野郎をワザワザ手元に置いてやなあ、破壊された機材の代金と屋根の修理費用を全額返済するまで、俺の下で働かせてやるうつちゅうとんねん、分かったか？ ……この……………クソマヌケ野郎がああああああっ！」

両眼を見開いて、目を血走らせ、思いつきり叫んだユートは、深呼吸するとそのまま再び腰掛けた。

（んゝ、まあ、もっともな意見ではあるな。 ……だけどなあ）
確かに、今の命司には頼れる存在などどこにもいない。借金を負わされる理由はもつともだと思っし、それを返済するのにタダ働きするしかないのも仕方が無い。が、その際に聞いておかなければならない事もある。

「えゝ……………全額返済するまで、どのくらい、かかりそう……………かな？ ……額に刺さっているペンを引き抜いて、サインの体勢に入ると、しかし命司は手を動かさずにそう訊いた。

「……………さあ？ ……お前の働くと、あとは幸運次第ちゃうか？ ……ちなみに俺は、その額貯めんのに五年かかったけどな」

不機嫌も顕わにユートがそう返し、今度はサラがそれを補足する。「ちなみに、マイスターは秘法師で収入もハンパじゃないから。キミがこれから下働きするだけなら、一生かかっても返せないんじゃないや」

ないかな？」

（ああ、それはつまり、一生を奴隷で過ごせと）

「……なる、ほど、ねえ……」

呟きつつ、命司は三枚の書面全てにサインした。

「さ、これでいいだろ？ 早く出してくれ。凍えちまうよ」

言ってユートに書類を手渡す。

それを受け取ると、

「……まあ、ええやる」

ユートは命司の傍に立った。

そして命司を呪縛する氷の塊に手を触れる。直後、それはまるで、解けて水になる過程を飛ばし、一瞬にして気体にもなってしまうたかの様に消え失せた。

と同時に、命司の身体に熱が戻ってくる。不思議な事に服は少しも濡れていない。頭上にぽっかりと開いた天井の大穴からは日差しが照りつけ、命司の身体を温めていく。

（うーん、変温動物の気持ちが良い分かるな。生きているってスバラシイ！ その上で、借金なければもつとスバラシイんだけどな）

命司は、こちらに背中を向けてサラに何事かを指示しているユートを一瞥する。

「下行つて、コイツに合いそうな着替え持って来い。俺のでええで？」

「あいあい！ マイスター！」

サラは元気良く敬礼して見せると、そのまま階下へと続く階段を下りていく。

（チャーンズ到来！）

ユートは今、背を向けている。サラはいない。そして、命司は天井から壁まで続く大穴にそつと近づくと、下を覗き込んだ。高さは精々三メートルほどか。降りられない高さでもない。

もう一度ユートを見てみると、ユートは再度書面に目を通していい。時折耳が微かに動き、立派な金色のシッポが揺らめいている。

どうやら、完全に油断しているようだった。

と、

「マイスター！ マイスターが学生の時に着てたコレでいいかなあ？ 何着かあるから選んでもらうね〜！」

そんな声が階下から聞こえ、階段を上がってくる気配があった。

（今だ！）

命司は壁の穴を乗り越えようと、そのまま飛び降りた。

「あれ？ マイスター、メイジ君は？」

「……あ？ ああつ？ 野郎！ 逃げやがった！」

そんな会話が頭上から聞こえてくる中、命司はダッシュした。

（さ〜て、この後どうすっかなあ〜）

取り敢えず、間抜けな借金取りからは逃げる事ができた。が、問題はこの後だ。

眼前に広がる、いつかのテレビで見た様な、中国あたりの伝統的な町並みに似た風景。街路を疾走しながら、どこかに隠れられる所はないものかと探す。

大通りから一本奥の平走している道に入り、命司はひとまず物陰ものかげに隠れる事にした。

「あの恩知らずがあゝ……！」

命司が逃げるのに使ったと思われる壁の穴。そこから外を覗きながら、ユートは拳を握り締めていた。

「まあ、いいんじゃない？　マイスター。どっちにしたって、あの子じゃお金にならないよ。それに、あたしがいるじゃん」

そうサラが言うと、ユートはサラの奥襟おくえりを掴つかんで持ち上げ、テーブルの上に置いた。

「アホな事言うなや。ええか？　アイツの話が本当なら、この世界とちゃうとこの、異境の人間やで？　錬金術れんきんじゆつの機材一式の代金なんぞ、話にならんわ！　国共大の学者どもに価値刷り込んでやな、研究素材として売りつけたんねん！」

「でも、逃げちゃったよ？　どうするの？」

「お前は城門のところで見張つとれ。俺はセイバー仲間にそれとなく連絡しておく」

言つて、ユートはメモ帳にメイジの似顔絵を手早く描いた。

「似とるやろ？」

横線四本で眉と目、縦線一本で鼻、その下に口の横線。それに輪郭かくと髪を足すと、不思議な事に、メイジの似顔絵が出来上がる。

「ぶふっ！　うんうん！　そっくり！」

サラはケラケラと笑い出す。

「よし、んじゃ、これ持って行け！」

「あいあい！　いつてきまゝす！」

サラは手帳を破つて渡された似顔絵を上着のポケットに仕舞い込むと、メイジが逃げ出した壁の穴から飛び降りて走っていった。

「……しばらく、美味いもんも食べへんな……さて、端末端末、と……」

コートは一つため息を吐くと、瓦礫がれきを掘り返し始めた。黄色の属性を利用した、遠隔地えんかくち同士のコミュニケーションツールが、この世界にはある。金属鏡の形をしたそれを使って、同業者と連絡を取るつもりだった。

夕方になる頃、命司はようやくその場所に辿り着いた。

「ぐえ……マジ広え街だ。喉乾いた……腹も減った……何より疲れ
た……」

息も絶え絶えに呟きながら、命司は物陰から『それ』を見上げる。命司の目の前には、巨大な門があった。楼門、とでも言うのだからか。横幅は門を貫く大通りよりも広く、その高さは三十メートルを超えている様に思える。何階かの階層構造になっているようで、土壁の途中途中に四角い窓があり、屋根はこの街の一般家屋と同様に、瓦屋根のように見えた。基本的な造りは町並みを構成する家々と大差ないが、その材質や作り込み加減は、民家とは比べ物にならないほど立派に見える。

門に正対し、今度はそこから背後を見ると、中心地と思しき小高い丘の上に巨大な館が見えた。それは、あるいは城なのかも知れないが、楼門とは対照的に縦に巨大ではなく、横に巨大？いや、『広大』というべきなのか。

そして、大通りは門とその館を一直線に繋いでいる。

(さて、問題は、あの衛兵をどうするか、だな)

命司の視線の先には、どちらかと言えば中国風の武器を身に付け、槍を持った頑健な衛兵が二人いる。見とがめられなければ問題はないだろうが、万が一の事も考えておかなければならない。また、門の内側に二人という事は、外側にも二人程度は門番が居そうだし、つ
まり、四人以上という事もありうる。

他から出られる場所があればいいのだが、ユートの所から逃げ出し、こんな時間まで人目を避けて街を歩きまわっていると、どうも、

この街は城壁に取り囲まれている様子で、街から出るにはどうして
もこの門を抜けなければならぬようだ。その上で、件の門番の衛
兵達が、どうしたって障害になる。

こういった場面、映画なんかでは『入るのは難しいが、出るのは
楽だ』という判断でいいのだろうか。いや、だがそれでも一つ問題
がある。

それは、命司の風体。ジーンズと、ジャケットの下のTシャツ。
ごく普通の格好のつもりが、どこか時代がかった衣装が多いこの街
の住人と比べ、かえって目立ってしまったている。住民の中には西洋
風の服を着た連中もいるが、それもまた、精々が十七世紀とかその
辺の、半端に時代がかった服装だ。命司のものとは明らかに違う。
「ジャケット脱げば、労働者っぽく見えねえかな……あと、スコッ
プとかツルハシとかあれば、ソレっぽく見えるかも知れん」
そう呟いて、ジャケットを脱いだ時？

「上着、持ってたあげようか？」

そんな親切な言葉が届いた。

「あ、ありがとう。頼むよ」

ついつられて笑顔で振り返った先。

「って、うわああ！」

思わず一声叫び、命司は後退りした。

目の前には、サラがにんまりと微笑って立っていたのだ。

「……ね、お姉さん怒らないからさ、帰ろうよ？」

命司の様子に苦笑しながら、サラは手を差し伸べた。

（やべ、どうすっかな。なんかコイツ、バカ強いし）

初対面の時を思い出す。胸以外、精々が十二歳程度の女の子にし
か見えないこの人物。だが、彼女が放った一撃で、命司は一瞬で動
きを封じられた。何か武術を知っているのは間違いなさそうだが、
それもかなりの達人だろうという事は、格闘が素人の命司にだって
よく分かる。

いずれにしろ、すぐに対処は思い浮かばない。だったら、考える

時間が必要だ。

「つか、ユート……だっけ？ アイツはさすがにキレてるだろ？」
笑顔を引きつらせながら命司が訊いてみると、

サラはぶつくりと頬を膨らませた。左手を腰に当て、右手の人差し指を眼前で左右に振る。

「それはキミの自業自得でしょうが。でも、大人しく帰るなら、あたしがマイスターに口添えしてあげるよ。それに、キミがマイスターをどう思ってるかはなんとなく想像できるけど、そんなに悪い人じゃないよ？」

（いい人、でもないんだろ？ どう見ても、守銭奴ってカンジだったし……）

「知るかそんなもん。前の世界でも借金で苦労してんだよ俺は。それなのに、この世界で人生のリセットかけようとしたら、ハナから借金背負ってるって、どんな罰ゲームなんだよ？」

話しながら、命司は気付かれないように距離を取る。もうこうなったら強行突破あるのみだ。門番の間を全速力ですり抜ける。

「マイスターはねえ、あれでもキミの事心配してるんだよ？ キミ、ここから逃げてどこ行くのさ？ 戸籍も無いならまともな仕事には就けないし、場合によっては衛兵に捕まって、牢屋に入れられちゃうんだよ？」

微かに怒った様な貌をして、サラは必死に説得してくる。

だが、今の命司は自由が欲しい。『マトモな仕事』に就けないなら、裏を返せば『マトモじゃない仕事』になら就けるといふ事だろう。殺人にさえ手を染めないなら、それも悪くはない。少なくとも誰かの下で借金を返す為だけに働くより、よっぽど人間的なんじゃないかと思う。

「悪いな。アンタの気持ちは嬉しいけどさ……」

命司は声に力を込めた。

「俺は自由が欲しいんだ。だから、見逃してくれ……」

刹那、サラの反応が鈍った。

「……あ、え……でも……」

逡巡が、彼女の中で生まれたように見えた。

(言霊効いた！ ラッキー！)

一か八かの賭けではあったが、命司はサラに背を向けて門へと走った。全速力。疲れてはいるが、それでも全身に鞭打って足を動かす。ゴールは門の向こう側にある、『真の自由』だ。

「つて！ ああ〜っ？」

背後から、正気に戻ったサラの叫びが聞こえた。

(クソ！ 効果切れるの早ええよ！)

動揺するが、しかしそれで速度を落とすわけにはいかない。

背後から、軽く、しかも速い足音が聞こえてくる。サラの方が足が速い。

そして前方では??

「待て待て、止まれ！」

そう言つて、門の左に立つ衛兵が立ちはだかった。

(右……いや、すり抜けるなら左だ)

「止まらんか！」

右側の衛兵も駆けつけてくる。

そして、目の前の衛兵が槍を構えたその時??

「てえりやああああ！」

そんな気合と共に、

「ごはあつ？」

目の玉が飛び出るほどの鋭い打撃を後頭部に食らい、命司は意に反して数メートルほどスライディングを決め、衛兵の足にタッチダウンした。

「ぐおお……いいいてえええ〜っ！」

両手で後頭部を押さえ、足をばたつかせてしばらく悶絶する。

そんな命司に、ヤリの穂先が突きつけられた。

「これから閉門だというのに、何用か！ 珍妙な格好をしておって、怪しいヤツめ……お嬢さん、ご協力感謝しますぞ」

言葉尻で衛兵が視線を向けたのは、案の定サラだ。

「あ、いややや、違います。この子うちの新入りで。最近この街に来ただけで、白の国にお使い頼んだら、あつという間に飛び出して行っちゃってね。夕方に閉門する事も知らないイナカモンだから、ほんつと、指導が大変なんですよ……あはは……」

乾いた笑いをこぼすサラ。

「ほう、それは大変ですな。ところで、一応、身分の判る物を提示願えますか」

そんな言葉に、命司は思わず身体を固くする。

「ああ、このコの方、まだ申請中で。あたしで良ければ。……はい」
言つて、サラは一枚の名刺大の金属板を手渡した。

「……ほう、セイバーですな……護衛士サラ・アフメド。位階は第四階位武術士。マイスターは……なんと、ユート・ユーゼン殿ですか。それでは、この若者はユート殿のお弟子さんですか？」

「ああ、そんないいものじゃないの。タダの小間使だから。……じゃ、お騒がせしました」

言つて、サラはそそくさと命司の右足首を掴むと、衛兵に背を向けた。

そんな彼女の背に、一礼した衛兵がもう一声をかける。

「届けは、なるべく早く出して下さいね」

「あいあい〜！」

愛想笑いを浮かべ、サラは悶絶する命司を引きずつて、来た道を戻っていく。

「くっそ！ 離せよ歩けるから！」

「ダメー！ 逃げるんでしょっ？」

「逃げないから！」

そんなやりとりのあと、命司はようやく足を解放された。

「ったく……」

立ち上がり、身体の汚れを払い落としながら、命司が呟く。

「なによ、その態度。分かってないんでしょっけど、キミ命拾いし

「たんだからねっ？」

左手を腰に当て、右手で命司を指し示してサラは憤然ふんぜんとしている。その言葉に、衛兵が構えたヤリの穂先を思い出した。鋭利な先端えいりと、無慈悲な金属の輝きかがや。比較的平和な？？少なくとも生死に関わる様な争乱を経験した事のない命司でも、それが人殺しの道具だという事は理解出来る。

そして、仮に衛兵の脇わきをすり抜けることができたとしても、背後から刺されていたかもしれないという事も。

だが、それでも命司は譲れない。奴隷どれいになるために、この世界に来た訳ではないのだから。

「……なあ頼むよ。俺は自由になりたいんだよ」

そんな懇願こんがんを投げてみる。これは本気だ。だからこそ、あえて言こと霊たまは使わなかった。

「……ね、ちよつとお話ししよつか……来て」

そう言つと、サラは命司の手を取り、どこかへと引っ張っていくのだった。

数十分後、二人が着いたのは大通りの中間点。丘の中腹に位置する、噴水の在る円形の広場だった。

丸い池の中央に聳え立つ、巨大な十字の彫刻。その頂点から、水が溢れ出して落ちて行く。

そんな広場の南側にあるベンチに、命司は誘われた。

「……へえ、悪くないな……」

丘の中腹ながら、南側に視線を送ると、眼下に街並みが広がり、この都市の構造が良く理解できた。

ここは、湖の上に浮かぶ水上の城塞都市。先刻までいた門は、この都市の内と外を隔てる門なのだ。門の外は、そのまま外輪山まで一直線に大きな橋が延びている。見た限りの印象では、橋だけでも十キロメートルくらいの長さがありそうだ。

（……綺麗、だな……）

自然と、命司はそんな感慨を胸中に満たしていた。

夕日に照らされ朱色に映える壁と、斜めに落ちる影のコントラスト。街並みはどこか中国風で、異国情緒と共に懐かしささえも感じさせる。二階建て以上の建物ばかりだが、路地が広いせいも、東京のような狭苦しさは感じない。機能的でいて、しかし人間的な温かさを感じさせる街だと思った。

「メイジ君はさ……」

不意に、ベンチに腰掛けたサラが、夕暮れの景色を見つめながら口を開いた。

「マイスターのところにいた方が、いいと思うんだ」

夕日の光のせいだろうか。それまで小さな少女にしか見えなかつ

たサラの愛嬌あじこきょうたつぷりの面差しが??その横顔が、急に大人びた色を載のせる。

「……何が目的なんだ? 初対面の、それも得体の知れない俺なんか……金にだつてなんねーだろうし。奴隷どれい欲しいんなら、もっと丈夫うぶそうなのいるだろ。……まあ、機械とか家とか、壊したのは悪かつたけどさ……でもあれ、不可抗力ふかこうりょくつつか、俺だつてやりたくてやったワケじゃねーし」

それを聞いて、あはは、と、眉根まゆねを寄せてサラは笑った。

「そうだね、正直、マイスターが何考えてるかなんて分かんないけど、でも、なんか価値があると思つたみたいだよ? 異境の人間つただけで珍しいし、価値出たら売るとか言つてたけどね」

「けっ……守銭奴しゆせんどめ……」

吐き捨てるように命司は呟つぶやく。

だが、サラはそんな命司の顔を、真摯しんしな表情で見据みすえた。

「だからさ、借金なんて気にしなくていいと思つよ? ……それよ、住む場所と……ひよつとしたら秘法を学べる場所が、キミに与えられたかも知れないんだよ? この機会を、もっと大事にするべきだよ」

「秘法? つて、なんだよそれ」

「青、赤、黄色、白、黒、それと、光と闇。この要素で、世界は出来るの。それを自在あまじに操あやつつて、奇跡きせきを起こす技……つてとこかな」

そんなサラの説明に、命司は思わず苦笑くしよくする。確かに身をもつて体験した事だ。氷漬ひやぢけにされたり、眼、耳、口に何かをされて、こうして異境の人間と不自由なく会話をしている。奇跡以外のなにものでもないし、今更いまそれを疑う道理も無い。

「魔法みたいなもんか? ……つたく、えらくファンタジーな世界に来ちまつたもんだ」

『魔法』という言葉聞きとがめて、サラは頬ほを膨ふくらませた。

「魔じゃないよ、人聞きの悪い。そんな怪しい宗教みたいなものじゃないの、秘法は。ちゃんと理論があつて、体系づけられてるれっ

きとした学問なんだから。ってゆーか、あたしはむしろ、メイジ君の特殊な能力の方がよっぽどファンタジーだと思うよ？ なんなのあれ」

急に問われ、命司は一瞬頭をひねった。が、すぐに思い当たる。

「……ああ、言霊ことたまか。あんなもん、たいして役に立たないだろ。アಂತもすぐに正気に戻ったしな。前の世界じゃ、もつと便利に使えてただけだよ……」

だが、サラは不思議そうに命司を見ていた。

「そうかなあ？ あたしは武士の訓練で、対秘法訓練も受けたから、精神的な攻撃にも多少は耐えられるんだよね。立ち直りも早いしさ。でも、メイジ君のはバツチリ効いちゃったからなあ……あ、でも、マイスターには効かないと思うから、変に試さない方がいいよ？ 下手に機嫌損そこねたら大変だからね？」

「……まだ、ユートの厄介やっかいになるとは決めてないぞ」

「頑固がんこだねえ……じゃあ、こういうのはどう？ 一週間くらい泊まっただけ？ この世界に慣れてきたら、改めて逃げればいいよ。手伝ってはあげられないけど、うまくやれば見逃してはあげる」

(……信じていいのかな……でもコイツ、サバサバした性格っぽいし、嘘言うそつヤツだとも思えないんだよねあ)

これまで、バイト先や学校で、幸か不幸か命司は人を見る目を養ってきた。どこぞのバカ役人よりは、よっぽど人を見る目は確かだと思っっている。

「嘘じゃないって保証は？」

最後の確認として問うた命司の言葉に、サラは困ったような微笑ほほえみを浮かべた。

「疑り深いなあ……まあ、その方が頼もしいけどね。……キミ、ちよつと境遇じゆんごがあたしと似てるからさ。嘘だつたら煮るなり焼くなり好きにしていよ。えっちな事もしたい放題って事で！」

グ！ と、頬ほほを染めながら親指を立てて見せるサラ。

命司は思わず啞然あぜんとしてしまう。

「……いや、それはいいや。俺、ロリな趣味ないし」

刹那、サラの額に青筋が浮いた。

「し、失礼だねキミはっ！ このセクシーダイナマイツな大人の女性を前にして！」

言っつて、サラはその豊満な胸を両手で押し上げて見せる。

が、命司にはどう見ても、精々『発育のいい小学生』が背伸びをしているようにしか見えない。

「いやいやいや、間違っつた小学生にしか見えないから、マジで」

「こ、これでも二十三歳なんだからねっ？ もうとっくに結婚だつてできるんだからっ！」

悔しいのか、サラの目尻に涙が滲んだ。

ふと気がつくと、周囲には夕暮れ時の恋人たちが増えていて、命司とサラの、そんなやりとりを微笑みながら観察していた。

命司は急に気恥ずかしくなる。

「ああ、ああ、分かつたからサラ姐さん。はいはい、セクシーですねー」

「もっつ！ バカにしてえっつ！」

ブンブンと、拳を振り回し始めるサラ。「キーツ！」という書き文字を彼女の背景に当てたら、表現的に完璧になりそうな勢いだ。

(いや、これで二十三つて、絶対ムリがあるだろ……)

思わず、そんな感慨が命司の脳裏を過ぎつた。

「分かつたから、帰ろうぜ？ な？」

「ふん！ いいよ今更！ キミの事なんかもー知らないっ！」

すっかり臍を曲げてしまったサラ。だが、苦笑しながらも命司が歩き出すと、むくれっ面で、その後をついてくるのだった。

半ば廃墟と化したユートの家？？集合住宅の一戸に戻った時、

「遅いでサラ！ 何やとつたんやボケ！」

二人は、ユートのそんな一喝で出迎えられた。

命司にとつては初めて入る居間。一階は三部屋で、キッチン併設の居間と、その奥に個室らしきドアが見える。恐らく、ユートとサラ、それぞれの個室なのだろう。

日はもう沈みかけだが、居間は天井の照明によって明るく照らされている。電灯、という訳でもなさそうだが、広口ピンの様な形状の照明器具の中には、柔らかく発光する石のようなものが一つ入っている。それは、半ばほどが照明器具の中の透明な液体に浸されていた。

「ゴ、ゴメンなさい。って、あっちゃ〜……」

引きつった笑みを浮かべたかと思うと、サラはそう言って、右掌で顔を覆った。

湯呑み茶碗の様な食器を片手に、新聞らしき書面を見ているユート。その足元に、二人ほど氷漬けにされて転がされている何者かが居る。顔つきを見れば、どう考えてもカタギじゃないのは明白だ。詳しい事情は分からないが、強盗か何かの類なのだろう。

「さあ、さつさと衛兵呼んでこいよ」

そうサラに命令すると、ユートは転がっている男の一人？？その頭を踏みつけた。

「マ、マイスター、怪我はない？」

それは、心配からきたものか、それとも怒られたからなのか、半ば狼狽しているようにユートを観察しながら、サラが訊ねた。

だが、ユートは何事もなかったかのように、不敵な笑みを浮かべて見せる。

「俺がこんなヤツらに遅れを取るかアホウ。ったく、このクズ共、俺の属性宝珠ぞくせいほうじゆが欲しいんやったらな、黄色属性の秘法師連れてこいや。それも、メツチャ腕の立つヤツ」

冷徹れいてつに言い放つと、ユートは命司を見据みすえた。思わず、命司は担任に悪事がバレた学生のような気分になる。

そんな命司の脇わきをすり抜け、サラは再びどこかへ出かけて行った。恐らくは、衛兵を呼ぶためだろう。

「さて、メイジ君よ。手間かけさせよつて。言いたい事は山ほどあんなんけどな……取り敢えず、これに着替えてこいや」

言つて、ユートは命司に服を投げてよこした。

「着方なんて、知らねーぞ？」

「アホか。広げたら服の構造解わかるやろ。あとは頭使え」

(まあ、いいんだけどよ……)

「二階借りるぜ」

そう告げて、命司は木製の急な階段を登った。

登った先、二階には照明は無く、代わりに天井の穴から、落ちたばかりの夕日の残光が射し込んでいる。

「……綺麗な、街だよな……」

思わず、命司は呟つぶいていた。

灯りのともり始めた家々の窓。天井から続く壁の穴から、そんな風景が見える。上を見上げれば、残光の中に星が瞬またたき始めている。

あの都会の摩天楼まてんたうと、その狭間まはから微かに見えるだけの霞んだ空と比べると、そこには格別な美しさがあった。

「……ま……いつか。めんどくせえ」

渡された衣服一式を眼前に広げ、命司はそれを着る決意をした。

どうにも、サラに恩義を感じてしまっている自分がいる。ユートに関しても、気にくわない点は色々とあるが、確かに今逃げ出さなくとも、この世界の仕組みやシキタリ、掟おきてや法律、そんなものを知

つてからでも遅くはない。

それに、

「秘法……ね」

サラから聞いた話が、実は命司にとって非常に興味深かった。言い方が違うだけで、平たく言えばそれは魔法だ。そんなものが使えるようになるのだというのなら、確かにここにいる価値はある。専門学校で経理を習うより？いや、例えば有名大学を出て、官僚や政治家になれたとしても、その後で欲にまみれ、殺伐とした人生を歩むより、よほど刺激的、かつ充実した人生が送れるのではないのか。そう思ったのだ。

栄達というものに興味がある訳ではないが、せつかくこの世に生まれたのなら、命司とて『面白い人生だった』と言って死んでいけるような人生を歩んでみたい。

小一時間後。

サラが衛兵を引き連れて戻り、衛兵が侵入者を連行して行った後で、テーブルを囲むようにして、三人は椅子に腰掛けていた。

「……ハア？ お前、ナニユーとんの？」

命司が秘法を学びたいと言うと、ユートは啞然とした顔を向けてそう言った。

「いや、そしたらさ、俺も、少しはアンタの役に立てるじゃん？」

努めて真面目に切り出したつもりだったが、まあ、説得するのは一筋縄ではいかないことくらい、命司とて予想済みだ。だからこそ、命司は重ねてそう言ってみた。

が、ユートは氷の様に冷め切った視線を、命司ではなくサラに向ける。

「……お前か、焚きつけたんは。コイツ秘法師になるゆうことが、どないに大変なんか分かってへんみたいやで？ 属性宝珠とかどないすんねん？ 秘専の学費は？ 学院が認めへんで秘法師やつとると、ゴツツ違法なんはお前も分かってるやんな？ 借金だらけの俺がやな、お前の武専の時みたいに、ホイホイ金出せる思うなや？」

「わ、分かっているつてばマイスター。で、でもほら、前にも依頼の報酬が属性宝珠だったりした事もあったでしょ？」

引きつった笑みを浮かべるサラをよそに、ユートは扇ぐように手を振ってみせた。

「アカンアカン、お前、秘法師が属性宝珠取り込むとき、どんだけ危険なんか分かってへんやろ？ 体質に合わへんかったら、最低でも三日三晩寝込むんやで？ そないな危険な事させられっかいな。

……大切な売りもんやのに。なあ？」

最後の「なあ？」の部分で、ユートが命司に視線を送ってくる。

（いや、知らねーし。つか……）

「属性宝珠って、なんなんだ？」

堪えきれず、命司はそんな問いを口にした。今日この世界に来たばかりの人間を前にして、目の前の二人は遠慮なく専門用語を口にしてくれる。

「五大属性の説明は聞いたか？」

返ってきたユートの問に、命司は頷いた。あの広場で、サラから聞いた話の事だ。

「平たく言つとやな、俺ら秘法師は、世界に満ちた根源的な力を五つに分類したワケや。で、その根源的な力を人に利用できる形に変換する触媒が、属性宝珠つちゅー代物やねん。俺は黒の秘法師やから、水を司る属性宝珠を取り込んだる」

（黒、ね。腹黒そうなおイツにピッタリだぜ）

そう思い、内心でほくそえんだ時、不意にユートの手元からペンが飛翔して??

「うがっ！」

??メイジの額に突き刺さった。

「ナニしやがる！」

あまりの激痛に涙目になりながら立ち上がる。

と、ユートは片掌を突き出して、命司を制した。

「いや、まあ落ち着けや。お前の中から、実に失礼な波動を感じたもんやからなあ。……で、話の続きやけど、その属性宝珠つちゅーんが、これまた高価なシロモノでな？ まあ、一番やつすいもんでも、売れば一家族が一生遊んで暮らせるだけの価値があんねん。ちゅーても、遊び方にもよるやろけどな。せやから、依頼で報酬が属性宝珠やつても、お前にやれへん。ま、残念やけど、諦めえや」

「……マジか……おおーい、誰だよ、氣い持たせるようなこと言いやがったヤツは」

落胆し、命司はサラに恨みがましい視線を向ける。

「い、いや、でもほら、この先なんてワカンナイじゃない？ なん
だつたら、あたしが武術教えてあげよつか？」

愛想笑いを浮かべるサラに、じつとりとした視線を送りながら、
命司は口を開く。

「いらね〜よ……俺、ケンカとか向いてねーし。そもそも平和主義
者なんですよ？ 俺は」

命司の言い様に、ユートは苦笑を見せた。

「そないなツラやな。まあ、しばらくサラに預けるさかい、出来る
ことだけやつとれや」

「りよ〜かい」

言つて、命司はテーブルに突つ伏した。

(くっそ、結局下働きの奴隷かよ。絶対逃げ出してやる)

「あ、じゃ、じゃあ、ゴハンの支度するねっ！ 命司も手伝つてよ」

どこか間を取り繕つかのように、サラがそう言つと、

「……ヘイヘイ、了解でござんすよ、サラ姐さん」

命司はスジ目のままで立ち上がった。

?? やつと、あの方がこの世界に来て下さった??

?? それでは、早く我が家宝を見つけておかないと??

?? あの者達も、巧く事を運んでくれると良いのだけれど??

夕方から降り始めた雨は、日が落ちると共に強まり、雷雨へと発達した。

本来ならまだ残照がある筈の時刻でも、既に外は真の闇を形成している。

世界最大の研究教育機関である国際共立大学。その構内には、職員や学生が寝泊まりする為に、幾つかの寄宿舍が配置されている。漆黒の瓦屋根に丹塗りの土壁、一階の廊下と部屋には花崗岩の床。造りは素朴だが、しかしその構造は機能的で、何より建築に際し多数の秘法師を動員したため、最高級の堅牢さを誇っている建物だ。そんな寄宿舍の玄関にて、黒の国の王族付き女官エシユマは、主の帰りを待っていた。今日は主が学んでいる武専の授業が長引いているらしい。エシユマもまた武専の生徒ではあったが、学級が違う為にこうして宿舍に先に帰って、主の帰りを待っている。

と???

雷鳴とどろく豪雨の中から、鎧で完全武装した主が玄関に飛び込んできた。

「うわ〜！ ひどい雨だねこれは！」

エシユマの主は、顔立ちにまだあどけなさを残す若い騎士見習いだ。王位継承権の順位が低いため、王族の中でも比較的気楽な地位

を得ている。権威ある武専とはいえ、祖国から離れて暮らしているのもそういう理由が大きい。

「エラル様、お帰りなさいませ。お風邪を召しては大変です。早々にご入浴ください」

エシユマはタオルを手渡しながら、微笑んだ。

エシユマの主？ エラルもまた同じように微笑む。二人共に、笑顔がよく似ている。だが、似てはいるものの血の繋がりは無い。

背中で三つ編みにした白銀の長髪。額から生えた、黒の国の民の証である一対の小さな角。面差しは秀麗で、肌の色は北国の雪のようだ。そんな似通った容姿が、しかしエシユマに重要な役目を課してもいる。

その役目とは、つまり影武者だ。遠く本国から離れ、世界一安全だと言われている法治国家『ダイン』で暮らしているとは言え、いつなるとき何があるかは分からない。だからこそそのエシユマの存在なのだ。

「ありがとう、そうさせてもらうよ。……あ、そうだエシユマ。これ、直せるかな？」

そう言うと、エラルは首にかけていたペンダントを胸甲の中から取り出した。黒い組紐に通された、大粒の黒曜石。その表面には、両刃の戦斧の意匠が彫刻されている。それは、エラルの母の形見の品だ。

「どうかなさいましたか？」

エシユマが訊くと、エラルはペンダントを首から外した。そして、それをエシユマに手渡すと、そのまま自室に向かう。

エシユマもまた、手渡されたそれを観察してみると、エラルが言いたい事にはすぐに気付いた。

「あら、切れかかっていますね。今日の授業ですか？」

ヒモは丈夫な筈ではあるが、長年の使用と武専での過酷な授業で、そろそろ取替時の様子である。

「痛いー撃貫っちゃったからね。とどめになっちゃったかも。直る

かな？」

自室の扉の前に着くと、エラルは鍵を開けながら訊いた。

エシユマは頷いた。

「確か、エラル様のお荷物として、数本の予備を同梱してあった筈です。あとは私がお引き受けいたします故、どうぞ、ごゆっくりお身体を温めていらして下さい」

「そうさせてもらうよ。じゃ、エシユマ、また後で」

エラルは自室に入って着替え一式の入った袋を手に持つと、エシユマと入れ替わるようにして、大浴場へと向かった。大浴場は、四つある寄宿舎の中心に位置し、それぞれの寄宿舎と二階の渡り廊下で繋がっているのだ。

「さて、紐はどこに入れていたかしら……何せ、エラル様の大切な品。お帰りになる前に、仕上げなければ」

勝手知ったる主の部屋。エシユマは日々エラルの身の回りの世話をしている。その為、エラルの部屋は、本人以上に熟知していた。

カーテンを閉め、照明を点けると、椅子と机とベッドしか無い簡素な部屋の中で、エシユマは紐を探し始めた。

雷雨の中で、時折、雷光に照らし出される三つの影があった。

大学構内の寄宿舍。その中で、建物の周囲を生垣によって囲まれているものが二つある。大浴場を囲んで、東西南北に配された寄宿舍のうち、生垣があるのは西と南の建物だ。その西の寄宿舍の西側で、三つの影は蠢いている。

三つのうちの二つの影は木製のスコップを使って、生垣の両側から、生垣の一部??その一本の木の根元を掘り起こしている。

「ったくよ、木は青属性だから、白属性の金属に弱いんだろ? こんなもん、切り倒しちまえばいいじゃねえか」

掘っても掘っても根の先が見えずに、影??ロープを纏った男の一人は不平を漏らした。

「金属の道具使うとマズいんだってよ。根つこもキズ付けんたって指示だし」

「いいから急げ。この雨だ、ある程度掘ったら三人で引っこ抜くぞ」根元を掘る屈強な男達にそう言っ、傍にいる小柄な男は掘り返された穴を覗き込む。が、穴にはすぐに水が溜まり、状況は分からない。

しかしそれでも??

「よし、ここらで一度引つ張ってみよう」

小柄な男の提案で、根元を掘った生垣の木を三人で掴んだ。

「いくぞ! せえの! 引け!」

声にならない気合を発し、三人は引いた。

だがそれでも、容易には動かない。

ゆすってみる。一頻りそうしてから、再度引く。

微かな手応えを感じた。やがて??

ずり、と、大きく動いたのを手始めに、その木は抜け始めた。だが、

「お、おい、どこまで長いんだよ、この木はよっ?」

枝を離して幹を掴み、幹を離して根を掴み、その根がどこまでも続く。

「じゃあ、俺が木を向こうに引つ張って行くから、お前らは根を引いていってくれ」

小柄な男はそう言い置き、抜いた木を引つ張って歩いて行く。そして、二人の仲間から合図があった時、小柄な男はおよそ三丈三尺（約十メートル）以上も離れた場所に到達していた。

小柄な男が駆け戻ると、三人は互いに目配せをして頷き合った。そして、そのまま姿勢を低くし、生垣の内側に入った。

寄宿舍西側の壁には窓がない。が、男達はそこから南に回り込み、移動して行く。

とある部屋の前で先頭の小柄な男が合図をしながら止まると、出窓の下から背伸びをして、窓を覗いた。しかし、カーテンに仕切られている室内を窺い知る事が出来ない。

小柄な男は思案した。跳ね上げ式のガラス窓。その奥のカーテンを動かさなければ中の様子が窺えない。これまで培ってきた技術を駆使すれば窓を開けるのは容易いが、しかし、その前に一度頭目の指示を仰ぐべきだと思った。

小柄な男は右耳に右手を当て、口元に左手を当てた。それが秘法の発動条件となる。

「あ、カシラですか? 手筈は順調なんですが、部屋の中が見られやせん。灯りは点いてるんで、誰か居そうな気配なんですがね?」

…… ああ、分かりやした。お気を付けて」

小柄な男は通話を終了すると、仲間達に小声で指示を出す。

「このまま待機だ。首尾良く運べば出番はねえがな」

「うへえ、早く戻って酒が呑みてえ」

「全くだぜ」

口々に呟つぶやきながら、男達三人はその場で肩を寄せ合い、まるで出窓の部屋の備品でもあるかの様に固まった。

探し出した予備の組紐^{くみひも}。数本あるうちの一本??空色のそれ??に取り替えて、ペンダントの補修は完了した。

「さて、これで完了。……エラル様、この色を気に入って下さると良いのだけれど……」

椅子に腰掛けたまま、主の喜ぶ顔を想像しながらエシユマはペンダントを見つめた。エラルの母の家系に伝わる秘宝。どれほど強い衝撃^{おうちげ}を与えても傷一つ付かないという噂^{うわさ}の黒曜石。ある者はこれを古代ダイン王朝の秘宝を手に入れる為の鍵^{かぎ}だと言い、ある者は古代ダイン王朝が残した一千万の軍勢^{じゆんせい}を召喚^{まじかん}する呪物^{まじもの}だと言う。

結局のところ真相は良く分からないが、ただ一つ確かな事は、これがエラルの母の形見だという事だ。だからこそこのペンダントはエシユマにとっても大切な品だった。まるで、実の娘の様に可愛がってくれた、エラルの母の品なのだから。

「お母上様……エラル様は、私がお護り致します。ご安心ください」
エシユマはペンダントの黒曜石を両手に捧^{たか}げ持ち、瞑目^{めいもく}した。孤^こ児^じとして人買いに買われ、西の白の国に売られる所を買い取り、引き取って育ててくれた黒の国の第五王妃^{だいごおうひ}。その日から、エラルの遊び相手として、また世話係として、そして何より密やかに姉のようにな心持ちで、エシユマはエラルを見守ってきた。第五王妃亡き今となっても、王妃への感謝と忠節を忘れたことなどない。今もこうして目を瞑^{つむ}ると、王妃の笑顔がまぶたに浮かぶ。

だが、

不意に、エシユマは王妃の笑顔と共に、喉元^{のどもと}にひんやりとした殺気を感じた。

同時に、ドアの内鍵がかけられる音が響く。

「……何者です？」

両目を見開くと、身じろぎ一つせずにエシユマは問うた。

「へえ、冷静だ。騒ごうもんなら、少し刃を引いて声を出せなくしてやろうと思ってたのに。さすがは黒の国の王族」

どこかかんに障る、高い声質と口調。

（エラル様、どうかごゆっくりご入浴を……今戻ってはいけませんよ）

エシユマは覚悟を決めた。賊の目的は今一つ分からないが、どうやらエラルの部屋と知っていて侵入してきた様子だ。ならば、この『部屋の主として話をする』までの事。

「そなた達、私をエル＝アリエリ・メル・ハシユパカルと知っての狼藉か？」

「その通りだ。御足労だが、依頼人がそのペンダントと、アンタに用が有るそうなんだな。まあ、大人しく一緒に来てくれ。大人しくしてりゃ、悪いようにはしねえよ」

その声に、エシユマは思わず内心で身震いした。理知的な響きを持つその男の声は、いま喉元に刃を押し当てている男のものではない。この部屋に、自分以外に『二人』居る。その事実、その声を聞くまで気付かなかった？ いや、気づかせなかった事に、恐れを抱いたのだ。

「……用が済めば私と、このペンダントはここに帰してくれるのか？」

「さあね？ 依頼人次第だろ。嫌だと言っても連れてく事にはなるかな……立たせろ」

指示を受け、背後の男は首筋に刃を当てたままで、エシユマの左脇から手を通した。

「くっ……この痴れ者め……！」

刹那、エシユマは貌（かお）を一強ばらせた。嫌悪で全身の肌が粟立つ。男の手が、明らかにわざとエシユマの右乳房を鷲掴みにし

だからだ。

「おっと、これは済まねえな」

下卑^{げひ}た忍び笑いを耳元で漏らし、背後の男は味わうように撫^なでてから手を離す。

「よせ、遊んでる時間はないぞ」

仲間の戯^{たわむ}れを見咎^{みとが}めて、理知的な声が響く。

立ち上がったエシユマは、リーダーらしき男の顔を見た。

（こいつまさか……どこかの没落貴族……か？）

エシユマが見たのは、まだ若い?? 精々、三十代前半くらいに見える男だった。金髪^{きんぱつ}のウルフカットと、その精悍^{せいかん}な顔立ちが野性味を感じさせるが、しかしそれに反し、鼻に軽くかけているレンズの小さな丸眼鏡が、知性と、そしてどこか高貴さをも滲^{にじ}ませていた。

それに加えて、ただのならず者では無いような、理知的な声の響き。男は手に持った紙製の符を花崗岩^{かこうがん}の床に落とす。

「これは??」

エシユマは目を見張った。

符が床に落ちたその瞬間、そこには三人を囲むように円陣^{えんじん}が浮かび上がって見えた。そして、目の前の男と自分の身体、それから恐らくは背後の男の身体が、薄らいでいく。

「??まさか、転秘法陣??」

そんな疑問のみをその場に残し、エシユマと、そして二人の賊^{ぞく}は室内から完全に消え去った。

雷雨らいゆが激しくなる一方だというのに、この国共大には外に出ようとする物好きがいる。それは、一人の老爺らふやだった。

老爺はローブのフードを目深まぶかに被り、中庭に出ると、誰かを警戒けいかいするように周囲を見回して、泥どろと化した中庭の土に右手の人差し指を差し込んだ。

「さて、最高責任者たるもの、率先そうせんして見回りをせねばの。……しかしシリんに気づかれずに、シャワールームを覗のぞく事はできんもんか……こんな時は、黒の属性秘法を覚えておけば良かったと思ってしまうのう……」

溜息ためいきと共に、老爺はそう言った。秘法師は皆、その属性に対応した感知スキルを体得している。今夜の雷雨らいゆうで、黒属性？？水の属性の秘法師の感知範囲は大幅おほはばに広がっている筈はずなのだ。

ところが、老爺が修めた属性秘法は黄色？？つまり土の属性なのである。この雷雨らいゆうを活いかす事はできない。そして、それ故ゆえの悩みが老爺にはある。

老爺の悩みは、見回り？？を口実とした覗のぞき？？が、年々やりづらくなつていつているという事だ。年老いた我が身。これに活力を入れるのは、若い娘の『芸術的な美しさ』だけだと老爺は考えている。そんな『高尚こうこうな嗜好しゅうご』を変態呼ばわりされるのは心外だが、『芸術活動』を侵害しんがいされるのはもっと心外である。

老爺は、そのまま意識を集中する。腕を伝い、指を伝い、意識が大地という名の海せうに潜ひそむ。

「さうで、それでは一応念のため、寄宿舎から見回ってみるとするか」

老爺の意識は土中を進む。まるで水中を進むかのように、視覚が移動して行く。真上を見上げれば地上とその上の雷雨の模様も見え、視線を斜めにすれば、雨粒の向こうに構内の建物も見える。

土中に視線を戻せば、建物や周辺の植物が、まるで水に浮かんでいるかのように見えている。そして、目指す寄宿舎の周囲には、深くまで張った植物の根が見え、その根に囲まれた空間だけが、立体的な範囲で視認できなくなっている。それは、木を司る青の属性秘法『緑化結界』と呼ばれる代物だ。

「むうう……どこか一箇所でも、緑化結界の一部が落雷で燃えてくれんものかのう……」

植物の根??それが形成するのは、黄色属性の感知や秘法による侵入を防ぐ結界だ。老爺ほどの秘法師であれば、黄色属性が苦手とする青属性の結界でも、どうにかできる術はある。が、それをする、天敵であるシリンが来てしまう。結局、こうして自然災害でも待つより他に仕方が無いのだ。

だが??

「おや? なんじゃあれは?」

??この晩ばかりは少々事情が違っていた。視線の先で、どう見ても引き抜かれたとしか思えない結界樹が、緑化結界から離れた位置に倒れている。そして、その根の方向に結界の綻びは在った。

「……シリンの罠ではなからうな?」

思わず、そんな疑念が過ぎる。だが、老爺は千載一遇のこの好機を逃がすつもりも無い。

「いや、例え罠だとしてもじゃ! ワシは芸術と共に死ぬるぞ! 待っておれ女体!」

鼻息も荒く気合を入れると、老爺は結界の綻びに突進した。が、その刹那、老爺とすれ違うように、何かの秘法効果が勢い良く飛び出していった。それはあくまで擬似的な視覚だが、老爺の感覚は、『それ』がこの都の直下、奥深い場所へと高速で去っていったのを確かに見た。

「……感知範囲外に去ったか……何者じゃ……？」

黄色属性の感知スキルには、感知範囲に限界がある。その広さは水平方向には比較的ひかくてきに広いが、垂直方向にはなかなか延ばすことはできない。そして、この首都の地下には、古に滅び去った古代文明の都が眠っているとされている。だが、黄色の属性秘法の第一人者であるこの老爺でさえも、そこに辿り着いた事はないのだ。

「さて、どうしたものかの……」

老爺は思案に暮れた。これは、あるいはシリんと相談すべき事なのではないか。更に重大な事であれば、大学の職員会議、果てはこの国の国会で議題に上げなくてはいけない事柄ことがらに発展する可能性もある。そう思ったのだ。

それは、寄宿舎より飛び去っていった秘法が、『転移秘法』と呼ばれる高等秘法であった事と、何より、その行き先が実在も分からない口伝にのみ存在する地？？すなわち、この首都ダインの地下深くであるとい事だ。何かが胎動たいどうしつつある。そんな予感が老爺の胸中を満たし始める。

そんな時だった。

「……まずい、このままでは殺されてしまう」

老爺の本体が、何らかの攻撃を受けたらしい。こうして意識を身体から切り離しているお陰かげで痛みこそ感じないが、身体からは生命の危機が伝わってきているのだ。攻撃を加えた相手の正体は、おおよそ予想がついている。だが、『まだ』何もしていない老爺にとって、その攻撃は濡れ衣以外の何ものでもない。

「早く戻らねばならんか……シリんめ、早とちりしおって……戻ったら、そのまま気絶してしまうんじゃろうなあ……」

老爺の意識は、急いで『気絶する程のダメージが蓄積ちくせきしているであろう』本体に戻る事となってしまうた。

雷雨が収まったのは、真夜中の事だった。

「うお〜……やっと……星が見えた……」

天井と壁に穴の開いた二階の部屋で、星空を見上げながら命司は呟いた。まだ薄雲うすくものかかる星空。今この世界の季節は春という話ではあるが、外気温と変わらない室内は寒いとすら感じる。

「……春雷つつつても、風情ふせいねえよなあ……」

雷が苦手、という事もないのだが、さすがに低温と雷鳴の中で眠れるほど凶太くもない。

「……せめて屋根がなあ……まあ、自業自得じごうじとくなんだけどさ……」

自業自得、とはいうものの、多分に不可抗力ふかこうりきやくの色彩しきさいが強い。それでいてなお、まるで戒めいましのようにこの部屋を宛てがわれている。

（あの野郎、なんだかんだ言いながら、絶対罰ゲームだろコレ）

ユートの貌かおを思い出しながら室内を見渡すと、天井と壁の穴から降り注いだ雨が床を帯状に濡らしているのが良く分かる。そして命司が寝泊まりしている寝台は、辛かろうじてその帯から外れていた。

雲間から月光が差し込み、命司は寝台に戻った。

「借金……かあ……そりゃ経済活動がありや、金かねつて概念がいねんがあつても不思議じゃないけどな……」

横になり、天井を見上げながら命司は呟いた。明日で丁度一週間。それだけの日数を暮らして、ユートやサラから聞いた事も多くある。その上で命司が思うのは、この世界が、元居た世界に似ているという事だ。もちろん、相違点そうつてんは沢山たくさんある。獣人っぽい人間もいれば、妖精みたいな耳の長いヤツもいる。だが、感情や考え方に大きく違うところはない。異境の人間とは言え、やはり『人間』なのだ。

そして、文化。命司の普段着ふだんぎとなった狩衣かりぎぬに似た衣装を手始めに、サラの服や他の国の民族衣装も、どれもこれもがどこかで見たことがあるようなものばかりだ。

それから、名前。日本的なものばかりではないが、耳に入る半数くらいが、どこかで聞き覚えのある発音なのだ。

（結局のところ、『人間』がいれば、行き着くものは一緒なのかな……）

そんな事を考えながらも、ふと、命司は姉の顔と共に、別な発想が思い浮かんだ。

「……ま、あくまで可能性、だけどな……ああ、嫌なツラ思い出しちまった……寝よ」

明日は朝からこの工事だ。それに備え、命司は目を閉じた。

まだ夜も明けきらぬ時間。

国共大の正門脇に在る衛兵の屯所で、二人の騎士が話をしていた。双方ともに、額に黒の国の民の特徴である角を生やしている。だが若い騎士と比べて、巨漢の騎士の角は太く大きく、そして螺旋に巻いているのだった。

若い騎士はエラル。それから巨漢の騎士はエラルの護衛だ。

「ボクは……ねえラグル、ボクはどうしたらいいの？ ペンダントを護る為に、ボクは世界一安全なハズのこの国共大に来た。なのに、エシユマとペンダントが……消えるなんて……」

エラルは涙を滲ませて、唇を噛みしめた。

「エシユマの事は、判断がつきかねます。或いはすでに……」
「言つな！」

巨漢の騎士・ラグルの言葉に、エラルは声を高くした。

「エシユマに限って……そんな事、無い……」

「……そうですね。……ですが、エシユマがエラル様の身代わりとなったとするなら……その努力を無にする事は……」

「分かつてる！ 分かつてるよ……もう、エシユマの名前は……出さないよ……」

エラルの脳裏に蘇る、珠玉の思い出たち。物心ついた時から、いつも傍にいてくれた存在。それがエシユマだった。主従関係なのは解っている。でも、それでも、姉として慕っていた。口うるさいところも、厳しいところも、全て全て、エシユマの優しさだった事。それをエラルは知っている。

だから、何者かがエラルを連れ去ったというのであれば??自ら

の身代わりになったという可能性がある限り、エラルはエシユマの名を出さない。彼女の、苦勞に報むくいる為ために。

「時間になりましたら、セイバーを雇いましょう。とりわけ優秀なセイバーを。それがしにも、心当たりがあります故ゆえ」

ラゲルはエラルの肩に手を置き、慰なぐさめるようにそう言った。

「……そう……だね」

作った笑顔を、エラルは巨漢の騎士に向けた。

晴れた空と、吹き抜ける爽快な風。

大陸中央の高地に位置する法治国家ダイン。その国名と同名の都『ダイン』は、昨夜と打って変わって穏やかな天候に恵まれていた。

東西南北、四方の強国に囲まれ、それでも平穩を保つ世界一の都。その都市機能と美しさは、正に世界一の名に相応しい。

そんなダインの一角、閑静な住宅街で、早朝から工事の音が響きわたる。

「あゝ、やっと、屋根と壁が直るのねえ……」

事務所兼住宅の二階の部屋。職人たちが作業をする傍らで、サラが感涙と共に呟く。昨日、ようやく全ての瓦礫と機材の残骸を処分して、今日になって職人を呼んだという次第である。

「わ、悪かったよ……」

苦笑を浮かべながら、命司もまたそう言った。

命司がこの家兼事務所に身を置いて、早くも今日で一週間。その間、命司は炊事洗濯から事務仕事まで、一通りの作業をサラから学んでいた。とはいえ、学ぶというより、ここのやり方を教えて貰っただけで、あとはこなしていける仕事ばかりだが。

「でも、ま、この天井と壁が壊れたのを引換にメイジ君が来てくれた、って考えれば、安い買い物だったかもね」

にひひ、と笑って、サラは命司を見上げてくる。

そして、そんな何気ない言葉が、どうしてか命司には嬉しかった。どれだけ懸命に働いても、今まで言われた事のない言葉だったから、かもしれない。

そう思うと、嬉しい反面、気恥ずかしくもあった。

一週間暮らしてみても思った事だが、この世界は、人々が実にのんびりしている。この世界での労働時間は、平均四時間程度。八時から昼まで働けば、一日の仕事が終りとなる。

更に言えば、このユートのセイバー事務所に至っては、客が来なければする事など殆どない。ちなみにセイバーとは、いわゆる何でも屋だ。探偵業に近いが、顧客の依頼によっては特殊な品を扱うバィヤーの様な仕事もある。報酬はなかなか高額な様子で、しかしそれだけに時間を持て余す事も多い。

だがそれでも、サラはこうして助かっていると云ってくれる。嘘や冗談ではなく、本気で言っている事は伝わってくるが、反面、命司は『こんなんでいいのか?』という気後れもあった。持て余す時間が、どうにも勿体無く感じてしまうのだ。それは多分、人生の大半がタイムカードで価値を決められていたからだろうと思う。

「ま、まあ、これ以外にも、ヘンな機材ぶつ壊したけどな……」

「あゝ、それも入れたらトントンかな」

気恥ずかしさを誤魔化すため、苦笑しながら言った命司の言葉に、サラもまた苦笑を返してくる。その『トントン』というあたりを、高い評価なのか低い評価なのか、どう判断していいのかは微妙なところだ。

その間も、職人たちは次々と壁や天井を直して行く。ひどい壊れ方をしているようにも思えたのだが、彼らの作業を見ているうちに、命司は意外とそうでもないのか、とも思い始めていた。が、その傍らで、ふと思いついた事がある。

「なあ、サラ姐さん。これって、秘法で直せないのか?」

ふとそんな疑問を呟くと、

「あゝ、それはね……」

「それはな、兄ちゃん! ハッキリ言って可能なんだけどよ!」

不意に、頭の左右に巻角を生やした銀髪で中年の職人が、サラの言葉を遮るように口を挟んだ。

「可能なただけど？ 何か問題あるんスか？」

「おう！ 家の材質は主に木と土。つまり、青と黄色の秘法師がいりゃ、きれーに直せるってもんさ。けどな？ 青はまあ、それなりにいるんだが、いつの世代でも、黄色の秘法師がいねえのよ」

「ほお……」

職人の言葉に、命司は興味を誘われる。そこにサラが付け足した。「黄色の秘法師、人気ないからね。あたしの世代ん時も、秘専で黄色属性専攻してるコ、一人くらいしかいなかったなあ」

「へえ……なんで？」

半分も理解出来ないが、命司はとにかく話を促した。

「そりやおめえ、地味だからだろ？ 水を司る黒は万能だし、火を司る赤は、戦いに臨んで無類の強さだ。金を司る白は職人に喜ばれるし、木？？まあ、つまり広義に生命の事だな？？を司る青は、労働者に喜ばれる。ところがだ、土を司る黄色つてなあ、なんかこう、今一つパツとしねえんだな？」

話しながらも職人は手を休めない。その事に感心しつつも、命司は話の続きが気になった。

そこで、またサラが補足を加えてくる。

「ん、まあ、凄い術使えるって言えば、そうなただけどね……戦いで使えるのは、土壁を生成して障壁にするくらいだし……まあ、何百年か前の達人は、金属を生み出す性質を利用して、床から武器出したとか聞くけど。あとは……あ、そうだ、あれ！」

何かを思い出したかのように、サラは部屋の片隅に駆けて行く。

そして、一枚の金属鏡を持ってきた。

「これこれ。黄色属性と白の国の工業力が造り出した便利アイテム」

「ほお？」

命司は、サラが持ってきたそれを覗き込んだ。だが、特に何かが見える訳でもない。

「が、それに構わずサラはそれを床を這うワイヤーのようなものと繋いだ。」

刹那、

「……………おお！」

命司は思わず感嘆かんとんの声を漏もらした。

金属鏡の鏡面に、文字が浮かび上がったのだ。

(つて、なんかパソコンみてえ)

何か、製造元のロゴらしきものが浮かび上がり、それが消えると各種機能の案内の表示が出てきた。

「あゝ、俺の国にもこんなのがあったよ」

ネット喫茶を思い出し、ついそんな事を言う命司。

同時にサラの顔が引きつり、必死に「余計なこと言っちゃダメですよ！」とアイコンタクトを送ってくる。

が、

「あゝ、兄ちゃん、白の国の人だろ？ だったら知らない方がおかしいわな。わははははは！」

「わは！ ははははは！」

豪快こうかいに笑う職人につられ、命司とサラは、顔を引きつらせたままで一緒に笑った。

「あ、まあ、この『機種』の使い方はさ、このテの機械を持つてる人と、遠隔地えんかくちだろうと会話する事だよな。……………メイジ君には、今更いまさらミミタコだろうけど、ね……………」

微妙に視線をずらしながら、きわどい説明の仕方をするサラ。

「……………と、とまあ、こんな機械なくても、黄色の秘法師は、地面を通じて遠くの事を知る事ができるんだつてさ。意外とねゝ、地味だけど、セイバーには向いてると思うんだよねゝ。あと、おじさんが言ったみたいに、土木工事で活躍かつやくできるしね」

「……………ホンつと、地味なんだなオイ」

思わず、過ぎよぎった感慨を口にする、と、

「でもまあ、それだけに貴重だわな。それに、古代ダイイン王朝の秘宝とやらと、黄色の属性が密接な関係あるらしいしな！」

職人は、そう言っつて愉快ゆかいげに笑った。

「お、面白そうだね、それ！」

つい、命司もつられて笑顔を見せる。が、サラだけは違っていた。「え〜？ そんな胡散臭い話はいいよお。タダのおとぎ話でしょ？」心底冷え切った眼差しを向けて、サラは興味がない事をアピールする。

「……女は現実的だからな〜」

興を削がれ、思わず命司の声と職人の声が重なった。そんな時??

「サラ！ メイジ！ 降りてきなさい！ お客様ですよ！」
階下から、そんな声が耳に届いた。

「……え、ユー……ト？ つか、あれ？ 関西弁は？」
呆気にとられる命司の眼前で、サラは苦笑してみせる。

「ああ、メイジ君初めてだっけ？ カンサイベンってのはよく分かんないけど、あれがマイスターの営業トークだから。覚えといてね？ さ、行くよ！」

言って、サラは命司の手を引いて、階下へと向かった。

一階に降りると、慣れたもので、サラはさつそく客に出す茶の準備を始める。

命司はユートに手招きされ、その隣に座った。事務所と言っても、民家の居間である。食事もここで取っている以上、居間の中心には六人ほどが掛けられるテーブルと椅子があり、ユートと命司は、来客二人と差し向かいになるように陣取っている。

本日の客は、この水上都市ダイインに拠点を置く、街道警備騎士団の騎士だった。

二人ともに、同じ軍装をしている。騎士団の標準装備である巨大戦斧と、胸甲のみが西洋風で、小手やスカート、それから臍帯など、どこかエイジャンテイストのする防具一式。それらの総重量はかなりのものだと思われるが、しかし二人の騎士は、それを顔に出すことなど無かった。

(ふうん……職人のオッサンと、同族かな)

二人の風体に、命司は上階で作業をしている職人の顔を思い出す。騎士は、立派なヒゲを蓄えた大柄な中年と、命司とそう歳の違わないような、細身の若者だ。彼らは一様に、銀色の長髪を背中まで三つ編みにしている。そして、何より特徴的なのは、額から生えた二本の角だった。中年の方は、職人の親方と同様に貫禄のある巻角となっている。一方で、若者の方はまだ角も小さく、全体の長さは5センチほど、そして、巻角としては『巻き始め』といった趣だ。見た目には秀麗ではあるが、騎士としては優しげな、どこことなく頼りない面立ち。それ故に、なんとなく応援したくなる。そんな若者だ。「ユート・ユーゼン殿、貴殿の御高名は耳に聞こえております。先

日も、押入った属性宝珠目当ての賊を、一瞬で虜になされたとか。いや、我らが騎士団に欲しいくらいですな」

言って、中年の騎士は豪快に笑った。

「あ、あの、ラグル殿、そろそろ本題に……」
傍らの若い騎士に促され、ラグルと呼ばれた騎士は、額をぴしゃりと叩く。

「おっと、これは失礼。それに、まだ名乗っておりませんでしたな。儂はラグル・エトルカ。そしてこちらは、エラル・メ……」

「ラグル殿！ 名乗るくらい自分ですみます！」

ラグルの言葉を遮り、若い騎士がどこか恥ずかしげに制した。

（上司……ってワケでもないのか？ なんだか、妙な取り合わせだな）

ふと、二人のやりとりに、そんな感慨が浮かぶ。

「えっと、失礼。ボクは、エラル・ハシユパカル。名前から、黒の国の王族だとお察しされたかと思いますが、王族と言っても傍系です。今は一武术士として武専で学ぶ傍ら、こうして研修を兼ねて騎士見習いをしている身です。どうか固くならずにお願します」

（へえ……王族なのに、謙虚なんだな）

エラルの態度に、命司は思わず感心した。事情は良く分からないが、『なんだか良く分からない自信に満ち溢れて周囲を振り回すような連中』に囲まれて生きてきた身としては、エラルの態度は感動モノで、かつ好感が持てた。

「粗茶ですが、どうぞ」

どうしてか日本的なセリフを吐いて、サラが湯飲み茶碗を並べて行く。そしてサラもテーブルに着くのを待って、ユートは切り出した。

「では、エラル殿、ラグル殿、ご用件を承りましょうか」

「それでは……よろしく願います」

言って、二人の騎士は深々と頭を下げた。

「あれは、昨日の事です。ボクが武専での授業を終え、大浴場から

戻った時……」

よほど悔しいのか、エラルの目尻に涙が滲んだ。

それは昨日の事。武専？？国際共立大学付属武術士専門学院？？にて、戦技の授業の後、いつものように大浴場で入浴して、自身の個室に戻ると、確かにそこに置いたハズの、エラルの母の形見が無くなっていた。

慌てて寄宿舎の寮生に尋ねてみるも、誰も知らなければ、不審者を見た覚えもないという。

エラルは悔やんだ。母の形見とは、国の色を象徴するような黒曜石のペンダントだ。本来割れやすい筈の黒曜石。しかし、エラルのそれは特別な品だった。どんな衝撃を受けてもヒビ一つ入る事は無い。そして、その大粒の黒曜石の表面には、柄に二匹の蛇が絡みついていた、戦斧の紋章が刻印されている。

それは、母の祖先から脈々と受け継がれてきた家宝。譲り受けたその時に、絶対に肌身離さず持っている事、と、死の間際の母より託された物なのだ。

「やれやれ、武専も質が落ちたものだ。……いや、国共大そのものが……ですか？」

エラルの話聞き終えたユートは微かな皮肉を込めて苦笑した。それを見て、エラルは微かに下唇を噛んだ。

命司がふと見れば、そんなエラルの仕草がツボにハマったのか、サラが何かを堪えているように瞳を潤ませて、プルプルと震えている。この一週間ほどで分かった事だが、サラは美形に目がない。ユートに仕えているのも、半分以上はそんな事情からのようだ。

「とにかく……ボクの不注意だとは重々自覚しています。しかしそれだけに、母の形見を一刻たりとも他人の手に委ねていたくはないのです。どうか……ユート殿。貴殿は凄腕のセイバーだと聞き及んでおります。どうか……必ず、見つけ出して頂きたいのです」

必死だ、と、命司は思った。身内の形見の品なぞ持ったこともない命司には、エラルの心境は分からない。が、もしも祖父から譲り受けた言霊が『物』で、それを失くしたなら??そう思うと、エラルの気持ちも少しは理解出来る気がした。

「ふむ……そうですね。お引き受けするのは問題ないのですが……」
呟いて、ユートは懐から懐中時計を取り出した。命司の世界同様に、十二で刻まれた時刻。見方は少々異なるようだが、針は今の時間??午前七時を指している。

それを確認して、ユートは再び口を開いた。

「まだ開門前です。秘法師が関与していないのであれば、少なくとも品物はまだ城内にある筈。ラグル殿、一両日中に??そうですね、少なくとも今日だけでも、都の正門よりの出城を制限する事は可能ですか? 商人や旅行者から損失は出るでしょうが……それを黒の国が補填する事はできますか?」

ラグルは一瞬黙すと、しかし即答に近い形で頷いた。

それを見て、ユートが口元を微かに歪める。

「それでは、報酬はいかほど頂けるのでしょうか?」

ユートの言葉に命司は驚いた。相手は国。ふっかければいいものを、とも思うが、そこはそれ、口には出さない。

「そうですね……」

言って、ラグルは小さな巾着をテーブルに置いた。親指二本分くらい、本当に小さな、絹みたいな光沢を放つ、淡い桜色の巾着。その口を開け、その中身をテーブルの上に落とす。

かつん、と、固く乾いた音がした。

ごくり、と、サラの喉から音が響く。

それは、ラムネの栓にしているようなビー玉大の、黒い??それこそ、黒曜石のような色合いの玉だった。

「属性……宝珠……」

我慢しきれなかったのか、サラが目の色を変えて呟く。

「左様。八十年物です。我が国の第七階位の秘宝師が逝去した後、

その腹より取り出したものです……いかがですか？」

「はは……参りましたな。私が欲しがっていたものを、良くご存知で。……無論、成功報酬で結構です。それは一度お納め下さい」

どこか、いつになく気圧けあつされているように見えるユート。彼がそう告げると、ラグルは無言で属性宝珠を仕舞しまい込んだ。

「それでは、儂わしはこれで失礼いたします。門の件で急がねばなりませぬ故……では、エラル様は武専にお戻りください」

そう言っつて、ラグルは一礼すると、そのまま去っていった。

が、エラルは俯ひづいたまま、立ち去ろうとしない。

そんなエラルの様子に、ユートは命司とサラにアイコンタクトをしてきた。

「サラ、メイジ、ちょっと私の部屋へ……エラル殿、しばし失礼致します」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4670z/>

マレビトの楽園

2011年12月24日07時51分発行